闇の中の系図

半村 良

角川文庫

昭和五十四年十月二十日　初版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

闇の中の系図

著作者　半村良

発行者　角川春樹

印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
〒一〇二　振東京③一九五二〇八
電話東京(265)七一一一(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　旭印刷・本間製本

0193-137517-0946(0)

闇の中の系図

半村　良

角川文庫

4294

目次

第一章　列外の男　五
第二章　赤い影　三八
第三章　オレンジ色の夏　七三
第四章　黄ばんだ葉　一〇六
第五章　グリーン・ホール　一三九
第六章　蒼(あお)ざめた男　一六八
第七章　藍(あい)より青し　二〇一
第八章　紫色の制服　二三六
第九章　市街　二六七
解説　松田道弘　三〇〇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　列外の男

1

道ひとつへだてた向うに、かなり大きな染物工場があり、ブロック塀をこえて湿気の強い染料の匂いが漂って来る。

その染物工場では、毎年何回か必ずストさわぎがあった。そのたびに正門の前に大きな赤旗が何本もたち並び、あたり一面に小さなビラがベタベタと貼りつけられるのであった。

その正門はだだっぴろい道路に面していて、一日中車が騒音をたてて流れていた。乗用車よりは貨物車の数のほうが多く、それも長大なトレーラーやコンテナー車が目立つ。その中に都営バスと私鉄のバスが混っていて、このあたりの通勤の足を一手に引受けていた。

染物工場の正門横から、大きな道路と直角に、トラック二台がやっとすれ違える幅の道があって、両側に同じようなブロック塀がつらなっている。染物工場の塀には、この前のストの時のビラがそのまま残っていて、何かたけだけしい乱雑さを感じさせる。

反対側のとば口は、時々腹に響くような大型プレス機の衝撃音をたてる鉄工場だ。その鉄工場と染物工場の塀の間の道を進んで行くと、だいぶ奥へ入ってから、「山県プラスチックス」とい

う小さな工場の門が見えて来る。鉄工場の敷地はそこまでだが、向い側の染物工場の塀はその先へずっと続いて、突きあたりのT字路でおわっている。
それだけ染物工場は大きいわけだが、丁度山県プラスチックスの前に、特に染料の匂いを強く出す設備があるらしく、プラスチック工場の従業員たちは、その匂いをまるで自分の職場で出す匂いのように感じてしまっていた。
浅辺宏一はブロック塀によりかかり、すっかり慣れてしまった染料の匂いを嗅ぎながら、仲間の工員たちがやる卓球を見物していた。そこは塀と工場にはさまれた細長い道路のような場所で、工場の屋根の端から塀の上へ、斜めに青いプラスチックの海鼠板が張ってあり、下はコンクリートで舗装してあった。本来は工場で使うフェノール樹脂のあき罐や、製品を詰めた段ボールの箱を積むためのスペースだったのだが、仕事をくれる大企業の指導で、反対側に倉庫を作ってから不要になり、卓球台を二台入れて、工員達が昼休みに使えるようにしたのだ。
「考えて見ると情ないもんだな」
宏一は元気のない声で言った。
「何がだい」
同じような恰好で卓球を見物していた仲間のひとりが言った。
「厚生施設だぜ、こいつは」
「厚生施設……」
「そうさ。この卓球台二台だけが、わが社の厚生施設さ」

「そう言えばそうだ」

「東洋染色にはサッカーのグランドまであるって言うのにな」

「でもあんたはいいさ。いずれここを出て独立できるんだから」

宏一より七つ八つ年上の工員がそう言って溜め息をした。

「よくはないよ。独立したところで、ここの半分もないちっぽけな町工場さ。今は使われてる身だから厚生施設がどうのと気楽に文句も言えるけど、その時になったら卓球台ひとつ置けないだろうからね。経営者になったら、第一残業したって手当も出ないよ」

「でもいいよ。とにかく抜けだせるんだから。俺なんか一生このまんまだものな。せめて東洋染色みたいにボーナスや賃上げを要求できるといいんだけど……」

それたボールがころがって来て、宏一はひょいとそれを拾おうとした。ブロック塀の下に細長い隙間があいていて、軽いボールはそこからの風に煽られてバウンドが狂った。

「ちぇっ」

宏一は舌打ちして体を起す。

「近頃飲みに行った……」

「え……ああ」

宏一は微笑を泛べた。

「飲みたくて飲んで歩く時はいいけど、そんな金もないしね。俺なんか貧乏性だから、金持と付合うのは肩が凝っていけないよ」

「金持って……」

「仕事を憶えると言ったって、もう二年だろ。いくらなんでも、そうのんびりもしていられないさ」

「ああ、会社をはじめる準備か」

すると宏一は声をたてて笑った。

「大げさだよ、会社だなんて。おやじと共同ではじめるんだから多寡が知れてるさ」

自嘲のようであった。

2

午後五時三十分を過ぎると、その工場地帯の中央のだだっぴろい道を走るバスは、急に混雑をはじめる。最初の内は事務系の若い女たちが多い。五時半の終業とほとんど同時に、各工場の門からそういう女たちがとびだして来て近くの停留所に列を作る。

別に事務系と現場従業員の間に終業時間の差があるわけではない。しかし、なんと言っても、オフィスにいる者のほうが帰り仕度がしやすい。手や顔を洗わなくてもいいし、お仕着せの事務服があっても、それを脱げばその下は出勤した時の服装である。しかし、大部分の工場の現場従業員は、そう手早いわけには行かない。たいていはジャンパーとズボンといった作業用の制服に着換えている。それに帽子などもかぶらされているから、身仕度に事務系とどうしても二十分近い差が出てしまうのだ。

したがって、六時近くになると今度は現場の連中で、列がいっそう長くなる。通勤の装いだけがたのしみ、といったような若い娘たちのはなやかさもあるが、実際には大半が生活のために働く質素なみなりをしており、派手な服装のグループが幾つか帰ってしまうと、バス停の列は陰気な色にかわる。

女たちの年齢が少し上になり、バス停の列の色がくすんだ感じになる頃、定時で退社する男たちが現われる。六時すぎると、だからバスの中は男と女の比率が半々になる。二、三人ずつ連れだって工場を出るから、グループごとに終点までお喋りが続き、車内はひどく騒々しい。みな終点の国電駅か地下鉄の駅まで行くから、一度満員になったら最後まで空かない。男たちが出て来ると停留所ごとの列はますます長くなり、工場地帯の出口に近いところでは、バスはほとんどノン・ストップの状態になる。

乗客は九割がた定期券を持っている。以前は都営と私鉄の両方のバスの間に協定がなく、定期券ではどちらかのバスにしか乗れなかったが、工場の連合組織が直接運輸省にかけ合って共通定期券を認めさせたから、その点では少し便利になっている。それに、朝夕の通勤時間には、両方ともかなり増発に力をいれている。大きな工場地帯は一種の離島で、そこに大変な数の労働力が集中しているのだから、文字通り踵を接するような運行をしないとたちまち工場の連合組織から文句が出る。一般の住民組織と違って、政治力のある大企業につながっているだけに、連合組織の注文にはすぐ応じてくれるらしい。

そんなわけで、ノン・ストップでバスが通り過ぎても、バス停の工員たちはあまり気にしない。

どうにか乗れる余地を残した車がすぐ来てくれるからである。

バス停は目ぼしい工場の門を目安に作られていて、中にはバス停を前と後に二つも持ったマンモス工場もある。そして、その地域の退社ラッシュは意外に長く続く。各工場とも、残業時間が三十分きざみで一単位になっているせいだ。昔は個人個人の処理量や処理時間に応じて作業を切りあげるのが普通だから、残業と言っても時間に端数が出たが、今はほとんど流れ作業で、工場側の計画どおりに仕事が進められている。だからバス停の列も、六時すぎからは三十分ごとにひと山来る感じだ。もっとも、五時半から六時半までの山がなんと言っても一番大きく、六時半になるとバスの運行間隔もずっと長くなるし、バス停の列もずっと短くなる。

山県プラスチックスのようなごく小規模な工場の工員たちは、そのラッシュの山をうまく避けている。残業が昔風におおむね任意に切りあげられるので、適当に谷間の時間にバス停へ現われるのだ。彼らの生活の知恵はおそろしく正確に、すいたバスが来る時間をとらえている。だから浅辺宏一もほとんどバス停で並んだことがない。朝、国電の駅前で並ぶのは仕方ないとしても、宏一は帰りにはほとんどバス停で並んだことがない。ひょっとすると、この工場地帯へ出入りするようになってから、一度も並んだことがないのではなかろうか。

どうも、そういうことが嫌(きら)いな性分らしい。嫌いというよりは苦手(にがて)と言ったほうがいい性格なのだろう。たまにタイミングを合わせることに失敗して、列が出来ていたりすると、染物工場の塀によりかかり、列の外でいつまでも煙草(たばこ)を吸っていた。最後尾が乗ってもまだゆとりがあるとはっきり判ると、やっと煙草を棄(す)てて、ゆっくり一番最後から乗るのだ。さもなければ、誰(だれ)もい

なくなったのを見すまして、バス停の標識の下にポツンと立って次のバスを待つ。すぐうしろに列が出来ても、それと俺とは無関係だというような冷たい顔をしている。

似たような行動をとる女性のグループが、染色工場から時々出て来る。彼女らは染色デザイン課のデザイナーらしく、その連中にだけは、宏一も関心があるようであった。

3

その夕暮れ、浅辺宏一は例によってバス停の列外にいた。もうその時刻では、バスを待って並んでいるのは男ばかりであった。六、七分おきに、ドスーンと腹に響く音が、宏一のよりかかっている東洋染色の塀をふるわせて聞えて来る。山県プラスチックスのとなりの鉄工場の、大型プレス機がたてる音だ。

宏一がいつものように塀によりかかったのとほとんど同時に、東洋染色の門から、妙にとりすました感じの女が二人、足早に出て来た。宏一が列の外でバスを待っているのを知ると、ちょっと怯んだように足をとめ、自分たちも宏一から三メートルほど離れた場所の塀ぞいに立った。

宏一は彼女たちがいつも列外に立つ心理に、だいたいの見当をつけていた。彼女たちは染色図案の専門家で、いわばデザイナーであるから、工場で単純な手先の作業を繰り返す女子従業員たちとは、まるで違う立場の人間だと思っているのであろう。また、近頃では工場にもコンピューターが導入されているから、バスで通う男たちの中にはエレクトロニクスの要員も少しはいる。製品の研究、開発、企画、といった頭脳労働者も多くなっている。しかし、主としてプリント生

地のパターンを作りだしている彼女らにとっては、そういう工場地域の頭脳労働者とも、同格には扱われたくないという心理があるようだった。同じに見られたいとすれば、それは広告関係、出版関係、芸能関係……つまりマスコミのタレントたちであるはずであった。だが、この工場地帯にそういう人種はいない。彼女らは階層として孤立しており、なろうことなら同じ路線バスで通うのすら、本当は不当なのだと主張したいらしい。

宏一には、時々一緒になるそのデザイナー・グループの、いつもバス停の列外に立つ心理が、手にとるように感じられる。ということは、宏一自身もほとんど同じ心理で列に加わらないということになる。

宏一は、もし自分にこの工場地帯でロマンスが生まれるとすれば、それは東洋染色のデザイナー・グループの一人に違いないときめていた。だから偶然同じバスに乗り合わせることをたのしみにしていたし、時にはわざと同じになるように時間を見はからったりした。現にそうやって二人の女が自分を意識しているのが判ると、心の底に何か期待以上のものが湧きあがって来るのであった。あと必要なのは、自然で正当なきっかけだけである。

だが、そのきっかけがなかなか得られなかった。宏一にも、「お茶でも……」と強引に誘いかけるだけの図太さはあった。しかし、そういう不自然なきっかけづくりを嫌う美意識が強かった。「お茶でも……」はぶざまにすぎると思うのだ。断わられたときの態勢がまるで整っていない。断わられたら、あとはせいぜい物に動じない図太さを演ずるよりない。それでは自分の値打というものが、一挙にゼロになってとり返しがつかない。だから、宏一は彼女らに対していつまでも

醒めた姿勢をとりつづけ、ただひたすら、自然で正当なきっかけが与えられるのを待っているのだ。
列は少し長く、一台目のバスが客をつめこんで去った。二人の女は宏一と同じように、塀のそばで動かなかった。次のバスがすぐ近くに迫っていることが判っていた。
次のには確実に乗れる。……宏一は後続のバスの車内の明るさをちらりとたしかめてそう思った。混んでいれば暗く見えるのだが、次のバスの車内はかなり明るかった。女たちもそれを知ったのだろう。ためらわず今度はバス停の標識へ近づいた。宏一も、ふらり、といった感じで塀から背を離し、そのうしろへ近寄って行った。
バスが停りかけた時、あたふたと一人の男が追いついて来て宏一のうしろについた。
「ひゃあ、間に合った」
男はなれなれしく宏一の背中に手をあてて言った。ふり向くと同じ職場の係長で、沢井という男であった。宏一の上司にあたる。
「この前のが見えたんだが、混んでいたから多分やり過すだろうと思っていたよ」
少し息を切らせながら言い、バスへ持ちあげるように背中を押して、自分もあとに続いた。ドアがしまり、すぐ発車した。車内は思ったとおり混んでいなかった。といって、座席があいているわけもない。押さずに奥へつめられるといった程度で、宏一は二人の女と並んで吊革を握った。
「まったく、浅辺君はすいたのにしか乗らないんだからなあ。やっぱり違うよ。俺たちとは」
沢井は宏一より三つ四つ上だろうか。職場でのキャリアが長く、成型技術のコーチ役をつとめ

て、係長という肩書をもらっている。宏一は黙って笑った。浅辺という名を女たちが聞いたことは確実であった。ひょっとすると、すでに彼女らの間で噂ぐらいされているかも知れないというぬ惚れがあり、沢井の口からごく自然に自分の名が先方に伝わったのが、ちょっといい気分であった。

4

「浅辺君は立派だな」

沢井が言いだした。工場の仲間ではわりと話の判るほうであったが、それでもバスの中で声高にそんなことを喋る大まかさがあった。

「俺なんか。どうしてそんな……」

宏一は二人の女を充分に意識していた。前を向いたまま冷笑的に言う。

「いや、ほんとさ。俺たちは生活のために仕方なく働いているんだけど、君は違うだろ。仕事を憶えに来てる。いずれ経営者になるのが判ってるんだから、俺たちだったらそう真面目にはしていられないよ。気が向かなくて休んだって、誰も文句なんか言いはしないからな。その点、君は立派さ。なかなかそうは行かないもんだよ」

「冗談じゃないよ」

宏一は軽く笑って見せる。

「人間にはそれぞれ立場があってね。その立場になって見なければ本当のことは判らないもの

さ」

バスは工場の長い塀が続く道を走っている。この辺りでは、余程の事故でもない限り交通渋滞は滅多に起らない。或る意味で、東京の道路を埋める車輛群の出発点であり、同時に車庫地帯でもあるのだ。ここからワッと一度に押し出して行き、よそで渋滞を起して、また戻ってくるわけである。

「それはそうだろう。会社の経営だって楽な仕事じゃないもの。でも、俺たちの仕事よりはずっとやり甲斐があるさ。第一儲かるしね。今に口も利いてもらえなくなるよ」

「そんなことあるかい」

宏一は照れていた。照れながら、バスの窓ガラスに映る自分を観察した。経営者になるべき人物だとしても、どの程度の経営者になりそうに見えるだろうかと思った。

「そりゃ、中にはお高くとまってると言う奴もいないことはないけど、俺は君の人柄を買ってるぜ。お世辞じゃない、本当さ。冷たく見えるけど、案外人情家だからな。社員旅行の時そう思ったよ。西田の爺さんがゲロ吐いてへばっちまった時、最後まで面倒みてやってたもの」

西田の爺さんとは、六十近い年で工場に住み込んでいる、独身の守衛兼雑用係である。

「みんなが薄情すぎるからさ。物のはずみでしょうがなかったんだ」

「誰でもできるってことじゃないよ」

今夜の沢井は妙に宏一びいきであった。

「あすは土曜、あさっては日曜……」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com